

「またそんなこと言って。だれが糟糠そうこうの妻よ？ 一生の計画を立てただなんて、いつも出鱈目でたらめばかり！」

「聖人の曰く、凡そ事こと予めすれば則ち立ち、予めせざれば則ち廃す。人がこの世にいるのはせいぜい百年ってところだ。無駄に日々を過ごすのが嫌なら、まずはよくよく計画を立てておかないとね」

雪瑛は顔をあげると熱をこめて致庸を見た。そこで致庸は得意満面ちようで高説を開陳かいちんした。

「まず、天下の人が学問をするのは役人になるためだ。役人になった読書人の中には、むろん経国治世の志を抱いている人もいるけれど、大部分は単に俸禄ほうろくめあてさ。でもわたしは違う。喬家は大富豪とは言えないけれど、商売をしくじりさえしなきゃ、まず金に困ることはないだろう。だから、何も俸禄のために学問して役人になる必要はないんだ。しかもわたしは商家に生まれはしたけれど、長男ではないから家業を心配する必要もない。兄さんや嫂ねえさんだってわたしに家を継がせようなんて思ってもいらないからね。ということはつまり、わたしは天下で一番暇な人間ってことになる。天が喬致庸をこんな風に作ったわけだから、当然こっちもその思し召しに背くわけにはいかないってことさ」

雪瑛は一本指で致庸の顔をなぞってからかった。

「あらまあ、それは一体だれのことかしら？ ついさつきまで状元じようげんに及第して、末は將軍か大臣か、国家の要人になるんだなんて言ってた人が、舌の根も乾かないうちにお役人になるのは嫌だって言い出したの？」

「雪瑛、どうしてきみまでわたしのことを心の底から『修身齊家治國平天下』を目指している

ような輩だと思ふのさ？ ちえっ！ わたしは天に授けられた天下第一の暇人なんだよ？ そんな手合いに成り下がってたまるもんか！」

「フフ。またそんなこと言つて。天下には『修身齊家治國平天下』を指すよりもっと品格の高い人がいるとでも言いたいのか？」

致庸はボンと太股を叩いた。

「いい質問だね。豈聞かざらんや、古人云わく、帝王の功業は聖人の余事なりと。『修身齊家治國平天下』といった大事ですら眼中にない人間の心は、この濁世ではなく雲の上にあるんだ。そうとも、戻つてじっくり『莊子』を読めばよくわかるよ」

「フン、そんなの信じないわ、あなたがもしほんとうに莊子なら、太原府に郷試を受けに来たりしないわよ。莊子が科擧なんか受けに来ると思う？ 冗談言わないで！」

「雪瑛、わたしは莊子だけど、同時に一人の俗人でもあるのさ。俗人である以上、俗人のしがらみからは逃れられない。正直言つて、わたしが太原府に郷試を受けに来たのは、科擧に受かるためじゃなく、兄さんを安心させるためののさ。兄さんと嫂さんは三歳の時からわたしを育てて、学問までさせてくれた。その上わたしに喬家の商売を継いで金儲けをしることも言わない。ただ望んでいるのは、わたしが今年郷試に合格して、それから都に行つて進士の片隅にでも潜り込んで、喬家の門前に記念碑を建てて家名を上げることだけなんだ。わたしがもし今回の試験すらしくじつたら、兄さんと嫂さんをつかりさせてしまふだろう！ 進士になつたら、たぶんどのみちどこかの県令（県の長官）をすることになるだろう。そして、県令の任期を終えたら、わたしの一生の俗事はそれで終わりだよ。官服を脱ぎ捨てて俗人には戻らない。金も暇

もある大清国の莊子になるのさ。莊子の夢に出てきた胡蝶にね。状元の奥さんであるきみと一緒に、車一つに馬一頭で、山西を離れて……」

「ほんとうに？ 山西を離れてどこに行くの？」

致庸は雪瑛の形のいい鼻を指でつついて笑つた。

「供回りを質素にして万里の道を行くんだ。この国のすばらしい山河を普く観てまわるんだよ。たとえば、かつて孔子が登つた泰山とか、秦の始皇帝が蒙恬に作らせた万里の長城とか、蘇東坡が船を浮かべた赤壁とか、『徐霞客遊記』に出てくる黄山とか、崑崙山脈から東海に流れ出る黄河とか……」

雪瑛はうつとりとて言つた。

「すてきねえ、夢みたい！」

致庸は雪瑛を引き寄せると、ふたりは肩を並べて遠くの青い空と白い雲を眺めた。致庸は千古の心情悠々と口上を述べ立てた。

「それから、荊軻が始皇帝を暗殺する時に悲憤慷慨を歌つた易水、秦の將軍・白起が四十万の趙兵に抗して闘つた長平、楚の霸王が待ち伏せされた挙げ句敗れて自刎した垓下、謝家の小児郎が前秦の苻堅に大敗した淝水、隋の煬帝が開鑿した南北の大運河、唐の玄宗皇帝が楊貴妃に死を賜つた馬嵬駅……」

「すばらしいわ！ みんな行きたいと思つていたところばかり！」

致庸は雪瑛の肩を引き寄せると、深い思いをこめて向き合つて続けた。

「それから四大名都や、三大名楼や、奇山秀水、名所旧跡……雪瑛、わたしたちはこんな風に

毎年長江の南北を遊覧し、長城の内外を見物して、名城や大邦を訪れるんだ。そして祁県に戻つたら、山の中に別荘を建てて二人で閉じこもって読書をしよう。春は花を植えて、冬は釣りや狩りをして、一年一年、一日一日、まるで一对の神仙の眷属みたいに、老いの行方も知らず、悠々と遊んで暮らすんだ。雪瑛、わたしの夢は実現すると思うかい？ こんな莊子のお嫁さんになりたいかい？」

雪瑛は突然致庸の胸に顔を埋めると嗚咽を漏らした。

「致庸、なんて素敵なたる来像かしら。まるで終わることのない美しい夢みたい。そんなの到底信じられないわ！ 致庸、この世にそんな美しい日々なんてあるの？ 江雪瑛にそんなにすばらしい運命が待ち受けているの？ わたしほんとうに怖い」

致庸は涙を拭いてやると優しく言った。

「焦らなくていいんだよ。こんな日々はきつと来る。きみはただ待ってればいいんだよ」

雪瑛は呆然と致庸を見つめた。

「致庸、致庸、あなた、わたしを騙したりしないわね？ 今日からわたし待つことにするわ！」

二人の四つの目が見つめあい、万もの言葉を費やすよりもまなざしは多くの思いを伝えた。

しばらくして、雪瑛は突然致庸の手を引いて近くにある朽ちかけた小さな廟に走りだした。

どうしても誓いを立ててほしいのだからと言う。廟に入ると、雪瑛は神像の前で敬虔に跪いた。その有様に目を見張った致庸は、腹立たしいやらおかしいやらで、

「雪瑛、わたしと誓いを立てたいのかい？ でもここは財神の廟だよ、縁結びの神様の月下老人じゃないんだよ！」

雪瑛は致庸を無視して敬虔に祈禱を始めた。

「財神様、わたくし江雪瑛は本日あなた様にお誓い申し上げます。一生の間喬致庸以外の相手には嫁ぎません！ この誓いに違ふことがあれば死んだ方がましだと思ふほどの苦しい生涯を送りますように！」

雪瑛は言い終わると振り返って致庸を見た。致庸は頭を掻くと、不承不承跪いて手を合わせ、戯れに祈禱した。

「天にまします財神様、あなた様が司つておいでなのは天下の財政のことであつて、婚礼のことなど管轄外なのは承知いたしておりますが、しかし今日はそこを曲げてあなた様に誓わせていただきます。わたしも辞退するわけにはいきませんので、お手数かけてすみません」

「致庸、まじめにやつてよ、ここは神様の御前なのよ！」

致庸は尚もにやにやししながら雪瑛を見つめていたが、その目は優しく和み、くるりと神像に向き直ると二拝三拝して真摯に言った。

「山西祁県喬家堡の喬致庸は、生涯江雪瑛以外の女は決して娶りません。もしこの言に少しでも嘘がございましたら、死ぬに死ねず、心が切り裂かれる苦痛をお与えください！」

雪瑛が慌てて制止した。

「そんなこと言つちやだめ！」

致庸はすぐに身軽に立ち上がると、雪瑛を助け起こして笑つた。

「きみつて人は、きつきはわたしを止めなかつたに、言つてしまつてから不安になるんだな」

雪瑛はしばしじつと致庸を見つめていたが、ふいに口を覆つて笑いだすと、はにかんだよう

にもじもじしてから、精緻な造りの香袋を手渡した。致庸は大喜びで受け取ってきんざん褒めちぎったくせに、やはり冗談口を叩くのだった。

「これはつまり契りの品だよね？」

雪瑛はその言い様が恥ずかしくて、取り戻そうと手を伸ばしたが、致庸はさっとしまいこんだ。

「わかったよ、契りの品じゃなくて、わたしが寝過ごすのを心配してくれたんだね。試験場ですべての品に眠りかけて寝過ごしてしまったら試験をしにくくなるものね。そしたらきみとの一生の大事も台無しだ。雪瑛、安心しておくれ。この香袋を持って試験場に行けば、たとえ居眠りしても、この匂いのおかげですぐにハッと目が醒めるから！ ハハ！」